The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

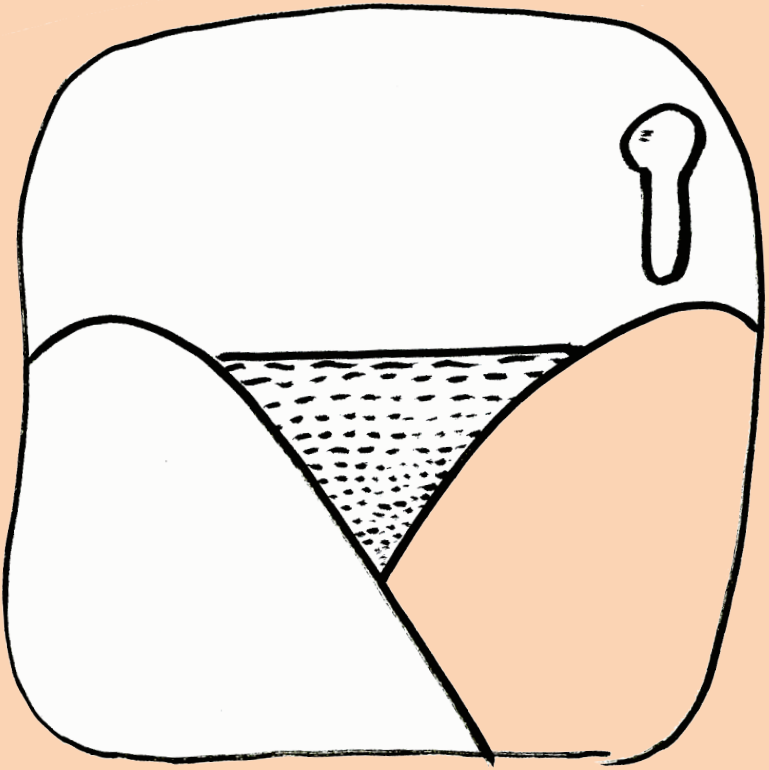
Title	関わり生きていくなかの慰め : 触れ合いから考えるケアのもうひとつのあり方
Author(s)	吉川, 優希美
Citation	臨床哲学のメチエ. 2017, 22, p. 91-128
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68188
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

それぞれの臨床哲学



吉川優希美　「関わり生きていくなかの慰め
——触れ合いから考えるケアのもうひとつのあり方」

高原耕平　「ツナミのあとで：タイ南部タクワ・パーでの３ヶ月」

中川雅道　「過去——タゴールと鳥」

辻明典　「ともに綴る言葉」

安谷屋剛夫　「p4c 日記」

渡邊陽祐　「対話を通して現れるもう一人のわたし
——フーコーの「パレーシア」を手がかりに」

高原耕平　「かけらをふちどる：フラグメントロギー再考」

関わり生きていくなかの慰め
――触れ合いから考えるケアのもうひとつのあり方――

吉川 優希美

目次

はじめに
第１章　共同感情による慰め
第２章　肌と肌の触れ合い
　1．これまでの哲学における触覚と語られてこなかった触れ合い
　2．肌の触れ合いがなしうること
第３章　肌の触れ合いによる感情のケア
第４章　慰めと愛の手前の親密さ
第５章　肌の触れ合いによる慰めと愛
　1．肌の触れ合いによる慰め
　2．慰めと愛
おわりに
参考文献

はじめに

レベッカ・ブラウン(Rebecca Brown)の著書、『体の贈り物』はエイズ患者のホームケア・ワーカーである語り手と、その患者との関わりを描いた物語である。その中の、患者の一人、コニーとのシーンを引用する。コニーは末期の患者であり、以前からホームケアヘルスケア・エイドであった語り手がコニーの死までより長い時間世話ができるレスパイト・エイドという制度を利用することになるの

だが、その手続きの電話の間に、友人がエイズであったことを知るという場面である。

> 私はコニーの部屋に戻って、何事もなかったように「UCS が段取りをつけてくれるって。あなた方が望むだけ私ここに来られる」コニーの顔がぱっと明るくなった。「ああ、よかった！」すごく嬉しそうな声だった。彼女は両腕を広げて、「こっちへ来て、抱きしめて！」と言った。わたしはいつもより長く彼女を抱きかかえていた。いつまでも抱きつづけ、離すことができなかった。そんなふうに私が抱いているのを感じとると、コニーは私の髪を撫ではじめた。その手は痩せていたが、思ったより力強かった。そして彼女は、すごく暖かい声で、「ハニー、どうしたの？どうしたの？話してくれる？」と言った。私の顔は彼女の肩に埋もれていた。寝間着が私の涙で濡れていた。「知り合いが病気になったって聞いたの」と私は言った。彼女はいっそう強く私を抱きしめ、「まあ、ハニー、可哀想に」と言った。（ブラウン，2004，pp.179-180）

ここに描かれている他者と抱きしめあうといったような肌の触れ合いが、人と関わり生きていくなかの感情の慰めの場面において非常に重要な意味をもつことを本論では明らかにしていく。
本論の目的は、感情の慰めの場面に見られる問題を、肌の触れ合いにより乗り越えを試みることである。『体の贈り物』に描かれているような肌の触れ合いは、慰めの場面で日常的に見られている。それを、言語による慰めに付随する現象としてだけでなく、肌の触れ合いの方にスポットライトを当て、肌の触れ合いは言語とは別に、どのような慰めを行っているのかということを検討していく。感情の慰めの場面の問題を検討していく過程で、肌の触れ合いの有用性を述べるが、そもそも感情のケアおける身体性に今一度スポットを当てることには意味があるだろう。そのように、従来の哲学において語られてこなかったもの、もしくは、ケアの場面にそぐわない定義がされてきたものを、新しく言葉を与えたり再定義したりしながら本論は進んでいく。

感情の慰めの場面の問題として、どのようなものが思い当たるだろうか。人は悲しい事や苦しい事があったときに「死にたい」と漏らすことがある。そのような他者を前にしたとき、私たちはその他者のために何ができるのだろうか。悲しみ苦しむ他者に対し、どうすればいいのかわからず、もしくは自分の行動がその他者を思うように慰めることができず苦しむことがあるのではないだろうか。そのようなときに、どうすれば他者の悲しさや苦しさに向き合い、決して呆然と立ち止まるのでなく、関わっていくことができるのかを本論では考えてきたい。なぜなら、立ち止まる、または立ち去ることをなかなか自分に許せないこともあるし、なにより関わることでその悲しみ苦しんでいる他者を少しでも救うことができるかもしれないからだ。ゆえに、この先イメージしているのは、悲しみ苦しむ人を触れられる距離で前にしているが、うまく慰められず、途方に暮れている、しかしその前から立ち去ることもできない、立ち去りたいと思えないような状況である。そこでは肌の触れ合いが豊かな価値を持っているように思われるが、その価値とはどのようなものなのか。その肌の触れ合いが慰めとして成立するのはどうしてなのか。そもそも、そのように立ち去れなくしているものは何なのか。本論の流れは、まず第 1 章で共同感情による慰めについて述べる。共同感情は確かに人を慰めうるが、それができないこともある。そのようなときに、肌の触れ合いが何をなしうるのか、ということを第 2 章、第 3 章で検討していく。第 2 章では特にこれまでの哲学で語られてこなかった肌の触れ合いとはどのようなものかを述べ、第 3 章ではその肌の触れ合いを感情のケアとして改めて定義する必要とはなにかを検討する。第 4 章では、そのような肌の触れ合いや、その前にある慰めを行いたいという欲望はどのようにして生まれるのか、何がそれを可能にしているのかを検討する。第 5 章では、肌の触れ合いによる慰めが 2 種類の愛によって成立し、その 2 種類の愛が慰めを可能にしていることを述べる。

第 1 章　共同感情による慰め

「2 人でいると、悲しさは半分に、喜びは 2 倍に」という言葉に端的に示されているように、己の感情が他者により共に享受されることは、時に大きな慰めになると思われる。悲しみや苦しさに対するその慰めの作用とはどのようなものなのだろうか。他者がともに感情を享受すること、それは一般に「共感」と呼ばれるものだ。マックス・シェーラー（Max Scheler）は、それを四つに分類する。この論文においては感情の分類もシェーラーの感情理論に従い、この先「感情」という言葉で指すのは、生命感情と心的・精神的感情を指す。身体的な痛みによる苦しみなどの感覚感情は含まない。

① 相互感得＝「あるひととの」、たとえば同一の苦しみを、直接的に共感すること。このときの自分と他者の苦しみは「対象的」にならない。
② 共同感情＝「あることへの」共同感情、つまり、あるひとの喜び「への」共歓、苦しみ「との」共苦。感得することへの志向性。自分と他者の苦しみは二つの異なった事実である。追感得からの共感得というプロセスを経る。
③ 感情伝播＝単純な感情伝播。他者の苦に対する知を前提としない。他者の感情は必要ない。例えば、病院を見て悲しくなるなど、「環境」が伝播により影響を及ぼすこともある。
④ 真の一体感＝他我と自我が無意識的に同一視される。自我が他我を吸い上げたり、その逆もある。一体感は共同感情の基底にある。大人になるに連れて知性のせいで失われがちなものである。一体感は常に自動的で人格や身体感覚を空虚にしたときのみようやく登場する。

シェーラーは、共感においてこれらが明確に区別されていないことを問題視し、特にこのうち、③④は真の共感ではないとする。この中で日常的に感情の慰めたりうるのは、②共同感情ではないだろうか。

人が悲しんでいるのを見たとき、人は同じ悲しみを感じようとす

ることがあるだろう。人を慰めるときに「その気持ち、わかるよ」と声をかけることは常套手段のように思われるし、その言葉に救われることもある。しかし、共同感情を持つ場面で気をつけなければいけないのは、「自分が相手の立場だったならば、こう感じるだろう」と感情移入を行わないということだ。シェーラーの定義にもあるように、共同感情とは、“その人の”感情を共に感じることであり、“自分の”感情として感じてはいけない。共同感情の価値は、相手への「専心没頭」が必要となる、という点にもあると思われるが、感情移入の場合、その専心は相手そのものから外れてしまっているのだ。また、感情移入のために相手が置かれている状況を詳しく観察することは、相手をただの観察対象と化してしまい、辱めてしまうことになる。これらのことから、慰めを目指す共同感情においては、なおさら感情移入は排除されるべきものだと結論づけられる。

感情移入や単なる一体感とははっきり区別された共同感情が、なぜ慰めになるのかというと、第一に、その感情の妥当性が他者という外部から支えられるからではないだろうか。共同感情を持たれたからといって、自分のその悲しみのような感情が消えたり、軽減されたりということはおそらくないだろうし、悲しむ人に対して発される「その気持ち、わかるよ」という言葉も悲しみの消失や軽減を目指して発されるものではない。共同感情が行いうるのは、その感情が他者にとっても存在しうるということ、その感情を持っていてもよいということを、その感情の持ち主以外の存在から承認するということだろう。それにより安心したり、孤独感が和らいだりもする。このように感情の操作を目的としないことも、共同感情の特徴だと言える。

しかし、共同感情が慰めとして本当に機能するためには、その共同感情が悲しんでいる本人に伝わる必要があるのではないだろうか。自分の悲しさを共に感じる人がいる、ということが分かって初めて人はその他者による慰めを感じるからだ。言葉がなくとも、悲しんでいることが分かることがあるように、共同感情が言葉を介するこ

となく伝わることもあるかもしれないが、基本的に言葉を介する必要があるだろう。そこに共同感情の限界が現れる。本当に、その悲しみを共感得しているとしても、それはどのような言葉によって伝えられるべきなのだろうか。人は、人の悲しみや苦しみを前にしたとき、言葉に詰まり、使う言葉を吟味する。言葉にした途端、空疎なセリフように感じられ、また、それが相手に響かず素通りされるような感覚を味わう。なぜそのようなことが起こってしまうのかというと、言語は経験を分節化し、構造化して表現するものであるため（シェーラー，1977，p.404）、言葉にできないものはそぎ落とされてしまうからだ。感情を“そのまま”言葉で表現することは普段でも難しく思われるのだから、特にこの共同感情の場面ではより一層問題ある限界として感じられるだろう。というのも、共同感情が慰めたりうるのは、“その感情”が外部から承認されるからであり、正しく“その感情”を指すことができなければ、その承認は見当違いで空しいものになってしまうからだ。次章にて、この言語による慰めの限界を補う手立ての一つとして肌の触れあいを提案する。感情の慰めのために、言語が行いうることと、肌の触れ合いが行いうることは、非常に異なっている。つまり、言語が行いうる慰めを、肌の触れ合いが代わりに行うことでその限界を乗り越えるのではない。肌の触れ合いは、言語とは違う次元で他者を慰める。

次章に行く前に、シェーラーにおいては内界の問題として示されている、どのようにして他者の悲しみや苦しみを知るのか、ということを、共同感情を抱く前の段階の問題としてここで一度取り扱っておこう。私たちは日常的に、誰かが悲しんでいるのを感じることができているが、それはなぜ可能なのか。それは、なにかしらの形で表現されているからである。①本人の言葉により、②本人の言葉以外のもの（表情など）により、③本人以外からの情報により、の三パターンに分類することができるだろう。共同感情に感情移入を混同した場合、同じ経験をしていなければ共同感情を持つことはできない、と結論される。しかし、その混同を避けた場合でも、同じ

経験をしていなければ共同感情が難しくなる場合がある。なぜなら、悲しむ人が、同じ経験をしていない他者では共同感情を持つことができないと考え、その感情を語らないということもあり得るからだ。悲しむ人を前にしたとき、人は「まず」どうするか考える。特に、どうすればいいのか分からないとき、その第一声をどのように発するか決めることは難しく感じられるだろう。それが決まらなければ、私たちは他者の前で立ち尽くすか、その前から立ち去ってしまうこともある。語ることは一種の呼びかけであり、応答でもあるため、①の場合は、相手の言葉に対し最初にその共同感情を示し返すことで、悲しむ他者に関わっていくことは自然なことである。しかし、②③の場合は、共同感情を持つことさえはばかられることもある。では、どのように関わり始めればいいのだろうか。この場合は、共同感情の前段階にあるべき「問いかけ」だけが許されているように思われる。野谷茂樹は、関心がある他者に対しては、ある事実がその他者にとってどのような意味を持つのか、そのアスペクトが気になり、問題となるという。

> ある出来事が起こって、どうもそれが原因で彼は悲しんでいる、ということは分かっても、そのできごとが彼をどのように意味付けているかに関しては、なお無知ないし誤解の余地が残されるのである。それゆえ、私は彼に尋ねねばならない。「なぜ悲しいのか。」これはけっして観察の省力化などではない。私はその人の観点を理解するために、たんに彼を観察するのではなく、対話に訴えねばならないのである。(野矢茂樹, 1995, p.144)

②③の場合においては、「原因」がわかることも、それすら分からないこともあるだろう。共同感情を持つためには、その人の個別性へと降りていく必要が出てくるが、そうすると、野矢の言葉を使っていえば、悲しみや苦しみのアスペクト的な「理由」が気になり始める。それは、他者の感情をより多く理解したいという欲望であり、それは他者を理解できない、捉えられない、という苦しみの段階に

進むということでもある。この新しく生じる他者知覚の問題については、後の章で肌のふれあいの意義を語る中で応えようと思う。ただし、人は悲しむ人を前にしたときおそらく自然と「どうしたの」と尋ねるだろう。「なぜ悲しいのか」は少し不自然であるし、非常に限定された質問だ。「どうしたの」には多くの意味が含まれるし、答え方にも多くの選択がある。「おじいちゃんが亡くなったの」、「そんなふうに聞かれるような顔してた？」。この質問は私にとって意味があるし、悲しんでいる人にとっても慰めになりうる。なぜなら、あなたに関心があり、あなたがどうしてそのようにつらそうなのか私は知りたいと思っているのだ、ということを伝える言葉であるからだ。そしてそれは、のちに説明する肌のふれあいとはまったく異なるけれども、そばにいて、あなたに関心があることを伝えるという点では共通している行為だ。しかも、この柔軟な問いかけは、肌の触れ合いの沈黙による曖昧さに通じるところがある。このような類似があるものの、相手に言語による応答を求めてしまう点や、その他者の悲しみの理解について「誤解の余地」をなくそうとしている点で肌の触れ合いとは大きく異なる。

第２章　肌と肌の触れ合い

本章では、まず肌と肌が触れあうこと、それはつまりどういうことなのかを検討する。また、慰めとして、言語の制約を受ける共同感情と比較した際に、肌の触れ合いのどのような点に価値を見出すのかもこの二章にて述べる。

1．これまでの哲学における触覚と語られてこなかった触れ合い

肌の触れ合いによる感情の慰めをより正確に記述するために、まず肌の触れ合いを、これまで哲学で語られてきた触覚と区別、比較しながら説明していこう。この論文内で、ただ「触れ合い」とせず、肌の触れ合い、という言葉を使用するのは、最近は「心の触れ合い」のような実際の接触を含まない場合にも用いられることがあることを懸念し、より正確に指示するためである。

これまでの哲学では、認識や知覚の文脈において触覚が語られてきた。そこでは、肌が触れること、というのはあくまで触れて知覚・認識すること、まさしく触覚であった。エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Lévinas）も触れることについて、触覚を検討することで答えているが、それは“触れ合い”とはまったく別のものである。レヴィナスは、視覚・触覚のどちらも探索・把持するものとしているが、それは触覚を探る手としてのみ想定しているからだろう。しかし、私たちの経験する日常的な肌の触れ合いでは、手だけが重要な意味をもっているわけではない。例えば、誰かと隣り合ってお互いの身体を預け合うようなとき、体の横の部分は完全に接し、その頭は相手の肩に支えられたり、支えたりしている。そこでは、相手の身体の重さ、相手の身体の些細な動き、呼吸、体温、服の質感や温度、匂い、やわらかさ、かたさ、いろいろなものを感じている。そしてそれは、触れあう肌の部分だけで感じているのではないし、ましてや手だけで感じとっているのではない。ゆえに、肌の触れ合いというとき、手だけを想定する必要はないし――肌ということで

誤解してほしくないのだが――間に衣服を挟んではいけないわけではない。性的な接触を連想する必要は全くないし、そのようなイメージは排除すべきだ。肌の触れ合いというために欠かせないであろう条件は、ぬくもりまたは圧が伝わるかどうかということだ。これまでの触覚のイメージそのままに、手を肌の触れ合いの最もたるものとしてしまうと――手は確かに手探りという言葉があるくらいだし――前に出すもの、探索するもの、何かを確認すること、対象をつかむもの、として肌の触れ合いを考え、レヴィナスのように相手を対象化するものと思ってしまうかもしれない。しかし、肌の触れ合いは手ではなく、身体の側面や全体で感じられるものだ。では、手は使ってはいけないのかというとそうではない。例えば、手を握り合うことは対象化であるとはいえない。なぜなら、手と手、つまり手を握りあったりすることは手の対象化の作用が相殺されるからだ。そのために、手とそれ以外の部分、頭や肩――頭をなでたり――だと対象化のイメージを持つ。しかし、それと同時に抱き合うことなどが行われている場合はその対象化の作用は和らぐ。

レヴィナスの触覚を検討することで、慰めとなる肌の触れ合いがどのように定義されるべきか明確になったはずである。次に実際の肌の触れ合いの場面において視覚はどのようになっているのか検討しておこう。レヴィナスは「顔は、見られもしないし、触れられない」（レヴィナス，1989，p.292）という。この「顔」とは、他者の絶対的他性のことであり、対象化できないものである。私は、悲しんでいる人や苦しんでいる人を見たとき、「顔」を顕著に感じる。つまり、汝殺すなかれという命令を、圧倒的他性を、責任の追及を感じるのである。日々の生活で、常に「顔」を感じながら過ごしてはいないし、もっと穏やかな他性のあり方、つまり「顔」もあるだろう。しかし、悲しんでいる人を前にしながらもどうすればよいか分からないとき、私たちはレヴィナスが述べるような「顔」を他者に感じることが多い。なぜなら、悲しむ他者に対してどうすればよいか分からないというのは、その他者の圧倒的他性を感じるという

ことでもあるからだ。そして、その顔を見ることは、いささか暴力的だと思われる。なぜなら、「顔」は本当には見られない、つまり把持し対象化することはできないものだが、身体的部分としての顔を見ることに対象化の先駆けを感じるからだ。一方で、「顔」も同じ意味で触れられないものだが、顔に触れることは暴力的ではないと思われる。なぜなら既に述べたように、肌の触れ合いにおける“触れる”は把握や把持を前提としないからだ。抱き合うときにお互いの頬が触れ合うような経験は暴力的であるとは言えないだろう。

視覚による対象化の先駆けは肌の触れ合いの場面でどのように克服されているのだろうか。例として、『体の贈り物』から肌の触れ合いの記述を引用する。これは、かつて語り手がホームケア・ワーカーとして関わっていたエドという患者との一遍である。ホスピスで生活するようになり、まわりの入居者が次々と亡くなっていくのを見たエドは、精神的にピリピリし、語り手に強く当たってしまったという場面である。

> 玄関で、いつものように別れの抱擁を交わした。私がそろそろ両腕を離そうとしたところで、彼がぎゅっと、さらに強く抱きしめてきた。「ごめんよ、このごろ感じ悪くて」とエドが私の髪のなかに向けて言った。「エド、そんなことないよ」と私は言った。でも彼が言おうとしてることはわかった。彼はまだ私を抱擁したままだったので、顔は見えなかった。「もうここにいたくないんだ」と彼は言った。「どこかへ行ってしまいたい」「可哀そうに、エド」と私は言った。私の頬は彼の胸に触れていた。彼の肋骨の感触が伝わってきた。（ブラウン，2004，p.106）

お互い抱きしめあっているために、顔は見えず、伝わるのは言葉と、そしてその肌の暖かさと「強く抱きしめ」た圧である。誰かを抱き締めたりしているとき、私たちはどこかを見ている。しかし、感情の慰めの場面を考えたとき、その視界に慰められるべき人の顔を見るべきではない。触れ合いながら、その姿をじっと見つめることは一種の要求となり把持となる。注目しておきたいのは、肌の触

れ合いの場面におけるこの“見ない”ということが、意図的にそうなるのではなく、非意識的に、自然とそうなることが多いということだ。言い換えると、その近さゆえに見えないのだ。対話的な対面とはまったく別種の近さである。先ほどの引用にもあったように、抱きしめあっているとき、私たちは自然とその肩に顔をうずめたり、その後ろに広がる景色を見たりしていないだろうか。誰かと会話するときに、相手の顔を見つめることが推奨されることはあっても、肌の触れ合いの場面で推奨されることはないだろう。以上のような肌の触れ合いやその中の視覚の働きのおかげで、近くにありながら優しいという逆説的な関係が、他者の近さと安全が結びつくというめったにない関係が、肌の触れ合いの場面では生じることになる。

レヴィナスの「顔」を参考にすることで、目の前の悲しむ人の他性のあり方や、自分の触覚や視覚がどのようにその悲しむ人に影響するのか考察することができた。同じように、レヴィナスの理論において重要な概念である「言説」を参考にしながら、慰めの場における言語と肌の触れ合いの関係はどのようなものであるべきか見ていこう。これまでの哲学において、肌の触れ合いのような肉体的なイメージの経験は、原始的なものとして、軽視、または成長するにつれて薄れていくものとされてきた。そして、それと反比例的に成長とともに現れ、重要視されるのが「言説」「言葉」である。幼児教育に関する本には、肌の触れ合いの重要性が、それに伴い母子関係の記述には肌の触れ合いが見られるのに、それ以外の分野ではほぼ見つけることができない。しかし、私たちの日常の生活にこの比率が対応していないように思われないだろうか。肌の触れ合いはもっと、頻繁でありふれているのではないだろうか。特に、感情の慰め、ケアの場面においては。ケアとの関係については次章で述べるため、ここでは深く立ち入らない。

さて、以上のことから、また、共同感情の言語による限界の乗り越えを述べるためにも、感情の慰めの場における肌の合いを語る際に「言説」に触れずに素通りすることはできない。肌の触れ合いは

言説のような内容を持った伝達を目指さない。肌に触れることにより、「悲しまないで」という内容を伝えることはできない。つまり、触れ合いは多くを伝えない代わりに、そぎ落とされるものもないのである。肌の触れ合いの場面であるため、「言語」というより「発語」と言った方がより的確だろうか。

他者と存在するなかで、「言説」を重要視するレヴィナスは、こう述べる。「懐疑は現れるものが真摯なものであるかどうかを疑うのだ」（レヴィナス,1989,p.129）「対話者は徴(シーニュ)しを残しつつも一切の解釈から逃れたのであり、この逃亡こそひとを脅えさせる沈黙にほかならない。これに対して、発話する他者は、みずからの発した徴しを加護し、この徴しに媒介されたみずからの現出に立ち会い、それによって現出の曖昧さを癒すのである」(レヴィナス，1989，p.129)と。これはその通りに思われるが、感情の慰めという場面を考える場合、ここで書かれていることはどのくらいあてはまるだろうか。沈黙は人を脅えさせることしかできないだろうか。人は、悲しいとき、苦しいときに、沈黙が増える。それは曖昧さを増やすものであるが、懐疑の喚起ではなく、真摯さの現れだと考えることはできないだろうか。それは、己の感情に対しての真摯さである。己の悲しみや苦しみを、分かりやすく整理されたものとして話せる人もいるだろう。しかし、そのような人を前に私は曖昧さの癒しより、よりいっそうの懐疑――これらの迷いのない言葉は、本当にこの人の悲しみや苦しみを表現できているのだろうか――を感じる。非常に乱雑な、支離滅裂な言葉も、そのつながりがないという点で一種の沈黙である。ここで指すのは、実際に音を発さない、という意味での沈黙よりも広い意味での沈黙である。そしてその沈黙が生み出す曖昧さは、不正確さを生み出す正確さを避けるためのものなのだ。ゆえに、その曖昧さを、懐疑を奪うという点で、感情の慰めの場面における発語にデメリットを感じる。あれほどに、他者の感情を完全に理解できないこと、つまりは終わることのない懐疑に苦しみ、肌の触れ合いに解決を見出そうとしていたにもかかわらず、懐疑の消

失を問題視するのは一見矛盾しているように思われる。しかし、その残された懐疑こそが、悲しんでいる、苦しんでいる人の感情を“共に”生きることの始まりを意味しているのだ。そこに内密な内面性を完全に知ることはできない他者である私が悲しむ人に関わりうる活路を見出すのだ。そして、肌の触れ合いはその沈黙を不躾に破らない。肌の触れ合いはその沈黙を守りながらも、その他者の前から逃亡しないし、その他者を世界から逃亡させもしないのだ。

第一章で、共同感情による慰めの限界として言語を告発していた。それは、一つ目に、相手に共同感情を伝えるためには言語を使用しなければならず、多くのものがそぎ落とされてしまうこと。二つ目に、悲しむ人が、自分の感情をより広く明かすことを、発語することをためらうとき、その悲しむ人に応答することさえためらわれ、慰めは困難を極めることであった。肌の触れ合いによる慰めでは、先ほど述べたような沈黙がその限界を乗り越えることを手伝う。この沈黙は肌の触れ合いが行われている場であるからこそ、成り立つものである。肌の触れ合いが行われていなければ、その悲しむ人の沈黙を守るための沈黙も、ただの応答の不在に感じられてしまうからである。ここで注意しておきたいのが、肌の触れ合いと言語の対立の構図を描きたいわけではないということである。発語や視覚が、常に他者を傷つけるようなものと考えているわけではないし、本論で述べるのは、ただ黙って悲しむ人に触ればいいということではない。私たちの普段の経験からも、肌の触れ合いの場面から発語をすべて消し去るのは不自然に思われるだろう。これまで何度も引用した『体の贈り物』の中でも、触れ合いながら発語は行われていたし、発語の内容によって抱きしめ方が変わるなど、肌の触れ合いと発語はその場で絡み合いながら行われていた。しかし、悲しみ苦しんでいる人には言説があまりにも鋭すぎると感じられることもある。「この逃亡によって〈他人〉は世界と無縁な〈他人〉と化す。逃亡する〈他人〉にとって、世界はあまりにも粗野で攻撃的なものなのだ。」（レヴィナス，1989，p.394）とレヴィナスは他性の弱さについて

述べるが、人は悲しみや苦しみに出会っている最中、自分の内面性に引き込もり、世界と無縁になりがちである。そして、その人にとって世界は粗野で攻撃的に思われる。これは、私が感情の慰めについて語る際、特筆しておきたい事である。なぜなら、慰めという感情のケアはまさにこの引きこもりから脱することを支援することだからである。

2. 肌の触れ合いがなしうること

これまで述べたような肌の触れ合いは、特に感情の慰めの場面においていったい何をなしうるのか。肌の触れ合いには、ただ暖かくて安心する、ということ以上のことがある。なぜなら、人に触れていることは、暖かいカイロに触れること、また犬などの動物に触れることから区別されうるからだ。

肌の触れ合いのその最も明確な特徴は、お互いの身体性を――自分の身体性も、他者の身体性も――普段よりも顕著に感じる、ということである。シェーラーの共同感情においても、他者はまずその身体を含む一つのまとまりをもった統一体として与えられていた（シェーラー，1977，p.419）が、人はどうしても感情に意識を向けるとき、その身体のことを忘れがちである。しかし、肌の触れ合いでは常にその身体性が与えられ続けられ、意識せざるをえなくなる。それはつまり、世界の中に身体をもった二人の人間が諸事物の中に“共にある”ということが分かるということだ。先ほどレヴィナスの引用で述べた「世界と無縁になる逃亡」が自動的にできなくなるのだ。同じ空間に他者と共にいたとしても、孤独を感じることはあり得ないことではないし、むしろ私たちが頻繁に感じる感覚でもある。しかし、肌と肌が触れあっているとき、お互いが何を考えているかということは全く関係なしに、共にいるという感覚が消えることはあり得ない。私たちは、誰かが傍にいてくれていることが分かること、それだけで心が慰められることもある。共同感情において

も、その“共に”という部分が重要であった。共同感情と異なるのは、言語による限界―なにかをそぎ落としてしまうこと、関係に縛られてしまうこと、相手に言語による応答を求めることになること、相手の内界へ侵入を試みてしまうこと―にぶつかるか、ぶつからないか、という点だ。肌の触れ合いによる感情の慰めのために、他者と同じ感情を持つ必要はない。

これまでも言語と肌の触れ合いの連関について述べてきたが、ここでさらに述べておこう。慰めというと、慰められていない状態から、慰められた状態への移行がある。その移行の過程、それこそが慰めという現象である。悲しんでいる人は永遠に悲しんでいるわけではない。そうでないためにも、慰めるわけだ。徐々に、慰められ、ケアされなければならない人から再びケアすることができる人に戻ってくる中で、肌の触れ合いはその割合を発語にとって代わられる。もしくは、その陰に身をひそめるようになる。慰められる中で、発語し、曖昧さを薄めていくこと、どう行動すればいいのか、どうしてほしいのか、対話しお互いに作り上げていくことは、発語することさえ難しかったころにおける肌の触れ合いの活躍を忘れた手のひら返しではない。どん底からの回復に発語は必要不可欠なのだ。いつまでも曖昧なままではいられない。ドラマや小説でも見かけたことがあるはずだ。悲しむ人を抱きしめ、頬ずりし、肩をさすったあとに、「さぁ、話してちょうだい」と発語を促す慰める人を。

さて、これらの要素から、共同感情では難しいような場合でも肌の触れ合いは慰めを行えるということが結論される。共同感情における限界にも挙げたが、言語によって感情の慰めを目指すとき、私たちはその感情の理由自体に迫ろうとしてなおさらその近づきがたさを感じたり、その関係性の中の己の立場によって、可能な慰めの幅が制約されたりしがちだ。例えば、その人の立場で言える言葉と言えない言葉がある――浮気を繰り返す人が、浮気され傷ついている友人をどのような言葉で慰めうるか、その立場故の難しさがある――だろう。しかしながら、肌の触れあいによる慰めは、感情その

ものに迫ろうとしないため、その場に身体を持ってともにいる、ということが重要となり、悲しみなどの感情の理由や、それに関する事実にどう関わっているかなどの立場は大きな制約とはならない。このように、肌の触れ合いは共同感情とは全く異なった次元から感情の慰めを目指すものである。

もしかすると、身体と精神を分けて考える人にとって、この身体の一部、肌が触れあうことで精神の状態に影響を与えられるという本論の主張はどこか胡散臭く感じられるかもしれない。しかし、精神は決してそれ自身で存在しているのではないし、私たちはシェーラーのいうように統一体として生を生きている。ゆえに、感情について話す際に、物理的な身体のことを排除しきることは不適当である。レヴィナスも次のようにいっている。

> 生とは身体である。が、この身体は自己の身体として生の充足を明かすだけでない。それは物理的諸力の交叉点、つまり、効力としての身体でもある。〔中略〕身体であること、それは一方では自分を支え自己の主人たることであるが、他方では大地に身を置くこと、他なるもののなかに存在し、それゆえ他なるものの身体を充塡されることでもある。しかし、いま一度述べておくなら、他なるものの身体によるこのような補塡は単なる依存として生起するのではない。他なるものの身体によって補塡されることを享受するものにとっては、このように補塡されることが幸福なのだ。〔中略〕自己とは他なるもののうちにありながらもわが家にあること、自己自身とは他なるものによって生きながらも自己自身であること、〜によって生きること、それが身体的実存のなかで具体化されるのだ。(レヴィナス, 1989, pp.248-249)

これを参考にしていえば、肌と肌の――身体的実存の――触れ合いは、自己のあり方そのものにまで影響を与えることが可能なのだ。しかも、悲しいときや苦しいとき、人は自己と向き合い、自己を問いつめている。そのような場面において肌の触れ合いを提案することは私たちにとって自然なことではないだろうか。このような身体

を持つがゆえに、人と人が肌を触れ合うことにはただ暖かい以上のことが結果すると言える。

　そして、ここで言われている身体の「補填」(encombrer)とは、己の実存の存続のために必要なものが己の実存を巻き込むことであるが、自分が誰かと共にいて慰められるとき、それと似たことが起きているとは言えないだろうか。肌の触れ合いは、他者から暖かさや圧を受け取る、つまり「補填」、自分のものとしている。例えば、私たちは慰められた時のことをどう表現して振り返るだろうか。あたたかいものが胸の中いっぱいに広がっていった、やせ細った気持ちが、みずみずしく蘇る、といったように、外部から与えられた糧を手に入れたように表現するのはそう特別なことではない。慰めと補填のそのような類似は、このように慰められる人にとっても適当に思われるし、慰める人にとってもそうであるように思われる。慰める側にある時に、肌の触れ合いを拒絶されることなく、相互に温もりや圧を与えあえると、自分がその悲しむ人にきちんと受け取られた満足感、拒否されなかった安心感を感じる。これは単に自分が肯定されたという喜びを生むのではない。これは、そのような自分を出発点とした利己的なものではなく、“悲しんで世界から逃亡していたあなた”に受け取られたという点に理由がある喜びである。だからこそ、慰める人にとっても意味があることになる。それはすなわち、回復の一種の現れ、まさに慰めが行われたことの示しだからである。

第３章　肌の触れ合いによる感情のケア

３章では、肌の触れ合いによる感情の慰めを、これまでの一般的なケアのあり方と比較しその特性を述べ、そのあり方が感情のケアにおいてどのような意味を持つのか検討する。本題に入る前に、まず感情のケアがどのようなものとされてきたか見ておこう。ここで想定される感情のケアは、日常にありふれた悲しみや苦しみに関わっており、かつそこに専門家は登場しないような場面で行われるものである。これまで、そのような感情のケアは、その人の内面性の問題であり、本人が克服すべきもので、周りの人間は環境の一部として、環境に働きかけることしかできない、サポーター的な立ち位置であった。友人などをケアする場面で、肌の触れ合いは日常的に行われているはずなのに、こうして書かれることはなかったのではないだろうか。それを文字にすること、見落とさないことは本論の目的の一つでもある。

まずは、ネル・ノディングズ（Nel Noddings）とミルトン・メイヤロフ（Milton Mayeroff）を参考にしながらケアとは何かを検討し、感情の慰めを目指す肌の触れ合いが、ケアと呼ぶことができるのか検討する。ノディングスは、ケアを特徴づけるものは「専心没頭」(engrossment)であるという。その専心没頭に関する記述を引用する。

> これまでわたしがあらましを述べてきた「共有される感情」という概念は、投げ入れを含んでいるのではなく、受け入れを含んでいるのである。わたしはそれを「専心没頭」と呼んできた。いわば、他のひとの実相を客観的な与件として分析し、それから「そういう状況なら自分はどのように感じるのであろうか」と問うような形で、その人の身に自分を置いて考えるのではない。それどころか、分析し、状況に応じた構図を組み立てたいという誘惑を退けるのである。他のひとに対して投げいれを行っているのではなく、自分自身の中に他のひとを受け入れ、そしてその人と共に見たり感じたりするのである。（ノディングズ，1977，p.46）

感情の慰めを目指す肌の触れ合いも、感情と身体の両方を忘れることなく、他者をそのまま受け入れるものであるため、この条件を満たしているだろう。また、メイヤロフはケアが他者の「成長」を助けるものであるという点を何度も強調するが、世界の中で生きていくことを支えることを目指す肌の触れ合いによる感情の慰めは、人間の最も根本的な成長を支えるものであるため、ケアと呼ぶにふさわしい。しかし、肌の触れ合いによる感情の慰めをわざわざケアと呼ぶことにどのような意味があるのだろうか。おそらく、多くの人は、誰かが悲しんでいる場面でその人の手を握るということに違和感を持たないだろう。しかし、それはケアとは呼ばれず、単に愛ある行動とされているように思われる。ケアを要求することは、人間の権利としてより認められるべきであるようだが、愛ある行動を要求することは、それに応える他者の裁量に任せられているように思わないだろうか。ゆえに、感情の慰めを目指す肌の触れ合いをケアと呼ぶことは、様々な感情に苦しむ人が持つその苦しみをどうにかしたい、してほしいという要求が“ケアの関係”のなかに入ることで、満たされるべき要求として認識されるという点にまず価値がある。次に、これまで身体性を重要視し、かつケアと呼ばれてきたもの――母子関係、看護ケア――には、そもそもそこに肌の触れ合いが含まれていた。しかしながら、それらのケアにおいても感情のケアが行われているにもかかわらず、その肌の触れ合いが感情のケアを行っているというふうに取り上げられることはなかった。そして、感情のケア、とはっきり言われるケアにおいては言語ばかりが重視され、身体性、つまり肌の触れ合いがなしうることは注目されなかった。このような事実が明らかにするのは、感情の慰めの場面には豊かな価値をもつ肌の触れ合いがあるということが無視されてきたということだ。それを改めるためにも、肌の触れ合いによる感情の慰めを、感情のケア、と呼びたい。副題にもあるように、そういう意味でも、“忘れられてきた”感情のケアのもうひとつのあり方なのだ。

肌の触れ合いの経験は、2 章でも“原始的なもの”とされてきたと述べたが、やはり母子関係に始まり、それに代表されるように思われる。そして、幼児が成長していくにつれその経験は薄れ、成人して以降は取り立てて扱われることがなくなる。むしろ、そのような身体よりも、精神というものが成長の指標となるため、身体経験はなかなか注目されない。ゆえに、肌の触れ合いが重要とされてきたようなケア ── 母子関係、看護ケア ── は、成長しやがてケアが不必要になることを目指すものであり、母と子供が決して反転することはないように、ケアする側・される側というものがその関係の中では固定的であるものが多い。しかし、感情のケアに関しては、そのような固定的なケアの関係の維持は難しいし、適していない。なぜなら、感情は“ある関係の中で”固定的にならない、つまり例えば私とあなたの関係において、どちらかがずっと悲しんでいるということはあまり考えられない。そのため、感情の慰めにおいて目指されるケアは、そのようないつか終わるべき援助のようなものではなく、生きていく中でそのケアする・されるの役割を自由に行き来するようなものである。その援助が必要なくなるときがそのケアの価値の完成なのではなく、援助されている状態そのものにおいてその価値は完結し、次の瞬間にはケアする側の人間がケアされる側になることも可能なケアであり、それは長期間的なものをイメージしない。それは、簡単にそのケアする・されるの関係が反転したり、すぐに別の人と、別の関係において行われるような、生きている間に何度も何度も行われるようなものである。事実、私たちは、慰めていたはずが気づけば自分が慰められていたというようなこともあるし、そのように感情のケアが行われることがなければ、私たちの感情は慰められないままであることがもっと多くなってしまうだろう。以上の理由から、感情のケアにおいては固定的でないケアの関係が適しているのだが、その点においてよりいっそう肌の触れ合いが価値を持つ。というのも、肌が触れている・触れられているというこの二つの状態は非常に容易く反転可能であり強固に固定された関係にはなりえな

いからだ。メルロポンティもその曖昧な体制に言及している。

> したがって、私が自分の二つの手をたがいに重ね合わせたときに感じられるものは、並置された二つの対象を知覚するように一緒に感じられるような二つの感覚ではなくて、二つの手がそれぞれ〈触れるもの〉と〈触れられるもの〉との機能のなかで交互に交代できるような、曖昧な体制が問題なのである。（メルロポンティ，1974，p.165）

なぜこれが重要になるのかというと、触れられた人が、その触れている肌を意識した瞬間、その人は触れる人になっているのであり、その触れている他者の肌は、触れてもいい肌ということになるからである。この役割の移動は、ケアされる人を一方的に受動的な状態の中に埋もれてしまわないようにする。ゆえに、肌の触れ合いでは、ケアされる人同士が、ケアしあうということも可能になるのだ。同じ悲しみを共有する人がお互い抱き合うというシーンを思い浮かべることは容易だが、そこにお互いがケアしケアされる関係を見出すことも難しくないだろう。また、この触れる・触れられることの移動は、いつでも好きな時に可能であり、従来のケアにおける“ケアする・される”の移動よりも容易で、瞬時に行われ、能動性のもとに回帰することができる。ケアされる立場にありながら、能動的になれるということは、自己を安定させる点において非常に大きな要素だし、従来のケアではあまりフォーカスされてこなかったケアされる人の能動性である。肌の触れ合いは、このような意味でも感情のケアのもうひとつのあり方である。

第４章　慰めと愛の手前の親密さ

ここから再びレヴィナスを参考にしながら、私たちはなぜ共同感情や、肌の触れ合いをしたくなるのか――つまり、なぜ何もできずに悲しむ人や苦しむ人の前で立ち止まることをよしとしないときがあるのか――という部分に注目していきたいと思う。それを考えることは同時に、なぜ私たちは悲しむ人を慰めることができるのかを考えることでもある。私は、そのすべての始まりに親密さがあると考える。そしてこの親密さは、5 章で説明することになる慰めと愛の連関にも深くかかわっている。

これまで述べてきた共同感情、肌の触れ合いによる慰めの基盤となっていると思われる親密さとはどのようなものなのか、本当に基盤となっているのか、検討していこう。ここで述べる親密さとは社会学における親密圏のような親密さではない。つまり、恋人や家族を含むけれど、それに限定されはしない。そして、肌の触れ合いには触れ合えるための空間的な近さを含む親密さが必要である。これまで、肌の触れ合いは関係から制約を受けづらいと述べていたこともあり、ここで親密さという狭められた限定が、矛盾しているように感じる人もいるかもしれない。結局、肌が触れ合うなら、誰とでもいいのか、それとも関係に縛られたままなのか。私の考えはそのどちらでもない。親密であることは一種の制約ではあるが、肌の触れ合いによる感情の慰めの場面において一体どのような問題ある解放されるべき制約になるだろうか。親密さが慰めの何を阻むのだろうか。触れ合いによる感情のケアの場面において、それは矛盾しない。慰めの場面に親密さを前提とするということは、“その”他者にとってよりよいことを考えることである。レヴィナスの言葉を借りれば、「問いの誕生」である。その個別性に降りていくことは、ケアの基本的な要素である。なぜ人が悲しんでいるときに慰めようとするのかというと、私がそこにいるからであり、力の及ばないどこか別の場所にいるのではないからだ。そして私はその人に対し、関心

があり、野矢の言葉を借りると、その単相的な安定性が崩れて、複相的なアスペクトを定めることに必死になるからだ。私は何かをしなくてはならない、その人のために。私はその人の悲しさに応答しなければならない。人の悲しみに直面した時に、なにか行動するように突き動かされるこの感覚は私たちの誰もが一度は経験したことがあるのではないだろうか。そこでは、ほかでもない、私と、ほかでもないその他者との個別の親密さが求められる。普遍的な愛にはない“ほかでもない”である。

レヴィナスの理論において、絶対に〈同〉になることもなく、対象になることも、全体性のもとで見られることもない、超越、〈他〉、他性、これが他者である。その根源的分離は、絶対につながることがない。私は、この根源的分離を全体性のうちに吸収しないよう注意を払いながら、レヴィナスの理論の中では考慮されていないが私たちの日常には存在している、レヴィナスが述べるものとは別種の愛や親密さをその理論に組み込んでみようと思う。そうすることで、レヴィナスのいう「顔」の倫理が――特にケアの場における――プラクティカルなものとして参考になるはずだ。絶対的な分離から始まるレヴィナスの理論においても、親密さが出てくる部分はいくつかある。しかしそれは常に「女性的なもの」について語るときであり、そこでは異性愛的なものがイメージされている。そのような限定を受けた親密さでは、ケアの場面を考える際には不十分、または適していないように思われる。なぜなら、親密さは、悲しい人を前にしたときの何か行動するように急き立てられるような感覚を、より実践的な段階に持っていく過程において忘れることができない要素だと思われるからだ。レヴィナスは、〈欲望〉と欲求の区別を繰り返す。「〈欲望〉によって測られる、測定しえない法外なもの、それが顔である。〔中略〕〈欲望〉はその「対象」を起点として生まれる。〈欲望〉は顕現ないし啓示である。これに対して、欲求は〈魂〉にうがたれた空虚であり、あくまで主体を起点としている。」（レヴィナス，1989，p.79） この欲求とは区別されるべき〈欲望〉を具体

化させようとするもの、それが親密さだということはできないだろうか。というのも、他者の感情をケアしたいというとき、私たちはまず、他者が何を考えているのか、他者のために何をするのが最もよいのか考えるだろう。そのとき、私たちはまさに〈欲望〉しているといえる。計り知れない、他者の内面、無限、それを〈欲望〉している。ニュースで、誰かの悲しさに立ち会ったとき、そこに親密さがなければ、その〈欲望〉はすぐに「欲求」へと変化してしまう。今やそこにあるのは、私、主体が起点となった「どうにかしたい」である。〈欲望〉は決して満たされることがないため、私たちは慰める側にあるとき、あの有責性、無力感から解放されることがない。親密さは、その〈欲望〉を「欲求」に貶めず、かつつねに、ケアの実践的な行動を――可能かどうかは別として――目指させるものだ。

レヴィナスは、「顔」が実際に殺人に対する抵抗になりうることはなく、もしなるのならばその「顔」は知覚され、結局は全体性のもとに戻ってしまうため、「顔」が「顔」であるためには観念論にとどまることになると言っている。（レヴィナス，1989，p.301）だからこそ、そこであげられる例は、事前に一切かかわりのない、お腹をすかせた異邦人であり、親密さや愛が基盤となった日常的な場面に即したようなものは語られない。私はまったく次元の違うものを参考にしようとしているのだろうか。しかし、私たちが悲しんでいる他者を前にしたとき、レヴィナスのいう「顔」は、日常的なレベルで現れるし、より近しい他者に対してより強く感じる。レヴィナスを参考にすることで、慰めの場面では何が起こっているのかはっきりさせることができるはずだ。

キャロル・ギリガン（Carol Gilligan）は、仮想のジレンマを「実際のジレンマを抽象化した形態をとっているのですが、それは個々の人間の生活の歴史や心理状態から道徳的行為の部分だけを抽出して、さらに道徳問題と、その発生が可能な社会的偶然性とをはっきり区別してい」（ギリガン，1986，p.177）るものとしているが、これはまさにレヴィナスの主張が、実際のジレンマを素通りしてい

ることを説明しているといえる。私が考えたい「ケア」の段階での問題は、仮想のジレンマではなく、文脈に依存した特定性の観点からのジレンマである。そのジレンマの解決として、その関係や文脈に縛られないための肌の触れ合いによるケアを見出すのだが、それは仮想のジレンマの段階に入り、抽象的で広く一般に可能なものを目指すことと同じではない。

第５章　肌の触れ合いによる慰めと愛

１．肌の触れ合いによる慰め

これまで感情の慰めと肌の触れ合いについて長々と述べてきた。最後の章へと入る前に、最初の問題意識を思い出しておこう。悲しむ友人を前にしたとき、私たちは自分の無力さを感じ、ケアする人としてその前に存在することをためらい、ただ立ち尽くす。しかし、そこで立ち止まらずなにかできることはないのだろうか、どう関わっていけばよいのだろうかというものであった。この無力感は他者の存在の仕方そのものにも由来する。この無力感に関係すると思われる〈他者〉を前にした恥辱についてレヴィナスはこう述べる。

> 真理は、自分を恥じることのできる自由にもとづいている（したがって、真理は真理から演繹されるのではない）。〈他者〉はまず最初に事実、障碍であるのでもなければ、私を死の危険にさらすのでもない。〈他者〉は私の恥辱をとおして欲望されるのである。権能と自由の正当化しえない事実性を発見するためには、この事実性を対象として考えたり〈他者〉を対象として考えたりすることなく、無限によってみずからを測る必要がある。（レヴィナス，1989，p.116）

自分を恥じる、つまり、道徳的卑劣さの自覚からくる自己批判は、悲しむ人を前にしたときの無力感そのものだ。悲しむ友人を前にしたとき、私は、自分がケアされる人になろうとしているのを感じ、自分を恥じる。言い換えれば、ケアする人としてそこに現れることができるような能力を自分に見出そうとしない臆病さを感じるのである。それは立ち止まりであると同時に、スタート地点に立つことでもある。「みずからを独断的かつ暴力的なものと感じるとき、道徳は始まる」（レヴィナス，1989，p.117）のだ。自分は無力だ、というのは自分がこの人をケアするのにふさわしくない、つまり、自分がこの人にとって非常に独断的、暴力的な存在だ、いうことだ。

そう感じるとき、道徳は始まるのではないだろうか。

こうして始まる他者の感情の慰めを目指そうとする愛ある行動において、愛あるがゆえに生じてくる問題というものがあった。それは、関心ゆえの、他者知覚における、他者の絶対的に内密な人格というものだ。しかし、他者の苦しみなどの感情はすでに私に伝わっているし――だからこそ私はなにかしなければならないと感じるのだが――身体があること、同じ場を生きていることなどから、他者が何を考え感じているかは絶対に知りえない、というわけではない。かといって、他者の絶対的に内密な部分や、他者の裁量で内密にしうる部分がないわけでもない。この他者との決して埋まらない「距離」は、なくてはならないものだ。メルロポンティ、ギリガンも他者との距離の重要性を述べている。

> 当初の共感は、〈他者知覚〉よりはむしろ〈自分に対する無知〉にもとづいていたわけですが、成人の共感のほうは「他者」と「他者」との間に起こるものであって、自己と他人との相違が消滅することを前提にして成り立つようなものではないからです。（メルロポンティ, 1966, pp.138-139）

> 他者とのあいだに隔たりがあるために、親密性は自己と他者と再びかかわりあいをもたせる決定的な経験となります。（ギリガン，1986，p.288）

距離があるからこそ、私たちは慰めを行える。必要なのは、そういう距離が問題とならないような状況、慰めを阻むものとして立ち現れないような状況である。そのような状況のひとつとして、肌の触れ合いがあるのではないだろうか。

肌の触れ合いは感情を慰めるといいながら、感情の理解は目指さず、感情には直接アプローチしないと述べてきた。では、それは何もしていないことと何が違うのだろうか。私たちは、感情の理解を目指さずとも、感情を慰めうる。感情は決してそれだけを取り出して諸事物の中に並べられるようなものではない。感情はその人とい

う身体との統一体として存在している。決してその人の内界や、内面性の核などではない。そのようなものを想定してしまった段階で、慰めうると主張することはできなくなってしまうだろう。肌の触れ合いは、感情を変えるのでも、その感情の原因をなくすのでも、画期的な解決方法を提示するのでもない。では、何を変えているのか。人は深く悲しむとき、その悲しさに集中している。しばりつけられている。悲しみに暮れている。悲しみそのものである。それを和らげることが、慰めることである。普段はもっと余裕をもって、いろんな感情で、いろんなところに意識をもって生きていたということを思い出させるのだ。これを、“世界の中に身体を持った人間として存在することを思い出す”と表現してきた。これが、回復してきたということだ。悲しみの原因はそのままかもしれないし、なにが悲しいのかもわからないまま悲しいということもあり得る。しかし、そういうときでも、回復はあり得る。それは、悲しさが無限のものとして感じられなくなり、悲しさの終わりが見えるということだ。悲しみが、自分の存在そのものから、部分、対象や外部に近いもの、外部と内部の間、内部ではないもの、になってきた、ということだ。感情を完全に対象としたり、もしくは内界そのものとして取り扱ったりすることは、一種異常な状態なのだ。感情が慰められるとは、感情だけに集中していない状態で、つまり身体と意識の統一体として生きることができるようになるということだ。

また、私たちは肌の触れ合いの“赦しによる安堵が他者との近さの元で生きられる”という点にも慰めを感じる。この“赦し”とは、自分が悲しみ、苦しんでいることに対するものである。悲しみを誰かと共に生きることができたとき――つまり肌の触れ合いを行っているとき――私たちは悲しみながら生きていることを赦されたと感じることができる。だからこそ、悲しんでいることを他者に示したとき、「泣くな」、「それどころじゃない」などと言われると、まるでその悲しみが不当なものだといわれているようで、私たちは深く傷ついてしまうのではないだろうか。これは共同感情が慰めになりうるの

と似ている。レヴィナスは「赦し」を「赦しは過ぎ去った瞬間と関わる。過ぎ去った瞬間に過ちを犯した主体に対して、赦しは、まるでこの瞬間が過ぎ去ってはいないかのように、この主体が過ちに陥らなかったかのように存在することを許す。〔中略〕忘却が過去との関係を帳消しにするのに対して、赦しは赦された過去を浄化された現在のうちで維持する。」(レヴィナス, 1989, p.437)というように、「時間」と強く結びついたものとして述べる。肌の触れ合いによる感情のケアでも、過去と同時に、“現在、生を生きている”という側面がいっそう強調されなければならない。悲しみは消え去ったわけでもなく、“今も”ここにあるが、それは他者と共に“まさしく今”生きられており、そのことで私は赦され、安堵し、慰められていると感じることができる。肌の触れ合いによる感情の慰めでは、そのような赦しの時間性に加えて、他者との近さの元というもう一つの要素が重要である。肌の触れ合いによる感情のケアは、近さ――親密さということもできるだろうが――そのもとで行われなければならないし、その中でしか行うことができない。肌と肌の触れ合いをしたときに更新される関係、つまり“その肌と肌の触れ合いが安堵をもたらす関係”というのは、その場の一回性が強い。なぜなら、そのときの身体と強く結びついた関係だからだ。他者との近さと安全が結びついた関係は稀有だ。そしてそれは可傷性の緊張と責任の関係でもあり、それを乗り越えた喜びの関係でもある。時にはその喜びそのものが悲しみや苦しみの慰めにもなる。

２．慰めと愛

ここから慰めと愛の連関について述べるつもりであるが、まず、シェーラーとレヴィナスの愛をそれぞれまとめ、それと比較して私が本論で述べる愛がどのようなものかはっきりさせておく必要があるだろう。大雑把にいうと、シェーラーの愛は、「より高い価値存在に向かう運動」である。シェーラーは様々なものに対する愛を考察

しているが、肌の触れ合いによる感情の慰めにおける他者への愛は、シェーラーのいう「人格への愛」に近い。そこでは「関心視野」という、近くのものに対してより愛を感じるといった、まさしく、本論で扱う親密さの話をしており、そこでは広く普遍的な愛により高い価値を置く主義に反論している。

> 「関心視野のなかでより近いものを愛することは―この愛の担い手が生きものたるかぎり―より遠いものを愛することよりもいっそう高い価値がある」という命題が基礎を持つことになる。(シェーラー, 1977, p.314)

シェーラーの愛に関する議論のフロイトや、キリスト教的な部分は、この論文における目的には大きく関わらないが、この人格への愛の部分は非常に参考になる。シェーラーは、性愛についても述べているが、肌の触れ合いにはそのような性愛とは異なる愛が基盤となっている。ここで必要とされる愛は、異性愛を前提とする愛とはまったく別種の愛であるからだ。しかし、前章でも指摘したように、レヴィナスは異性愛を意識した文脈で親密さを語る。例えば、「恋人たちの連関は親密さ、二人の孤独、閉じた社会にとどまる非公共的なものの典型である。女性的なもの、それは社会に逆らう〈他人〉であり、二人の社会、親密なる社会、言語なき社会の成員である。このような社会性の親密さ(アンチミテ)を記述しておくべきであろう。」(レヴィナス，1989，p.409)などだ。ゆえに、本論で扱う親密さと、レヴィナスのいう親密さは同一ではないように思われる。親密さという言葉は、ある特定の他者と育まれている親しい関係という限定と、その親密さを究極まで狭めた近しい他者としての恋人や家族という限定という二つの意味を含むことができる。本論で述べるのは、前者の親密さである。レヴィナスの「閉じた社会にとどまる非公共的なもの」である親密さと対比的に区別し、本論で述べる親密さを「ネットワーク的親密さ」と呼びたいと思う。肌の触れ合いによる感情の慰めに必要な親密さは、家族や恋人に限られてしまうような閉じた

狭いエリアのイメージではなく、それぞれ特定の他者と育まれる固有の親密さのようなもので、ネットワーク的イメージである。これは、ギリガンの言葉を流用したものである。ギリガンはネットワーク的イメージを、階層的イメージと区別して次のように述べる。

> 人間関係は、階層的なイメージに投入されると本質的に不安定で、道徳的にも問題があるようにみえますが、それをいったんネットワークのイメージへ置き換えてみますと、階層の枠組みでは不平等な順序であったものが相互の結びつきの構造に変わってくるのです。(ギリガン, 1986, p.108)

親密さとは、相互でなければ親密さとは呼べないものである。親密さは、ただ一方的にも成立しうる好意とはまったく異なるものである。ゆえに親密さにはネットワークのイメージがより適したものであることが分かるだろう。そして、専心没頭が必要となるケアにおいてもネットワーク的イメージがふさわしい。レヴィナスにおいて、「intimité」は恋人同士でしか実現できない親密さだったのだろうか。しかし、私は、同性同士であろうと、可能であると考えるし、愛がある相手に対してならばその間にあるものだと考える。私が問題としたいのは愛の原理や愛の定義ではなく、愛ある、つまりは親密さのある関係が、どのように限定されるかである。そのような親密さや愛を成り立たせる必要条件として家族や恋人であることは求められない。そのような親密さや愛がない家族や恋人も存在しうるのだから。

従来のケアで言われていたケアの最終目的であるケアされる人が、ケアする人として立てるようになることは、慰める人が目指している慰めに似ている。それは、「悲しみ傷ついている人が、愛する人として立てるようになること」だ。つまり、友人が悲しんでいるのを前にして慰めようとするとき、相手を受動的な慰められる人として接しながら、その人が能動的に愛する人であることを究極的には願っている。親密な関係にある人の慰めを目指すとき、私はその動機

も、過程も、その人への愛を頼りにしている。そして、私たちは誰かを愛する時、やはりその人からも愛されたいと願うだろう。しかし、苦しみや悲しみはその人を内界へと向かわせ、“外の人間”に構う余裕を失わせる。早く元気になってほしい。早く元気になって、私を見てほしい。これは、先ほど慰めるとはどういうことかという部分で語った、悲しさに深く入り込み悲しみそのもののようになっている人を、外の世界へと意識を広げ、反省的でなくその時間を生きさせる、というところとつながっている。ここに、慰めと愛の連関が見て取れるだろう。愛することと、慰めることは決して分離した経験ではない。そして、すべては“その場で”起きている。ゆえに、この愛する、愛されるということも、その二者間のどこにいっても変わらない――恋人同士のような――固定的な関係そのものではなく、もちろん普遍的な愛などでもなく、その場限りのものである。その場で、愛し愛され、私を愛する人を愛することを目指しているのだ。肌の触れ合いにより慰められるとき、慰められる人は、もともと、その親密さがあったことを思い出し、その愛に浸る。そこに慰められる人も愛を流出させせる―つまり、ケアする人として出現することができる状態になる―ことができるとき、その人は多かれ少なかれ元気になっている。慰められている。愛を流出させること、それは、その２人が、その場にいることを認めて、世界の中に身体をもって存在すると気づき、自分を含む誰かのために能動的になることを厭わないということだ。

これまで、「肌の触れ合い」、「ケア」、「ネットワーク的親密さ」、「愛」とそれぞれ述べてきたが、ここで今それらのつながりを再びまとめて述べ、この論文の結論としよう。ここまで明確に区別することなく話してきたが、これまで述べてきた愛には二種類あった。「個別性に降りていく愛」と「今に作用する応答愛」である。まず、「個別性に降りていく愛」というのが、ケアには必要とされる愛である。個別性に降りていくとは、私とその他者との個別性に降りていくともいえる。そして、そこには、一人ひとりと繋がっていて、そのつな

がりごとにそれぞれの親密さがある。それは、私を中心に広がる親密さの輪のようなものではない。そのようなものをイメージしてしまえば、やはり親密さの究極は「家族」や「恋人」といった従来の愛の議論に戻ってしまうからだ。ゆえに「ネットワーク的親密さ」と呼んでいた。個別性に降りる愛、というのは“それぞれ”であるための基盤である。私とあなたの関係の個別性である。なぜ個別的でなければいけないのか。それは、ケアが専心没頭を要求するからである。そしてその専心没頭から自分と他者のそれぞれの文脈を無視したケアが結果することは決してない。

　そのような愛や親密さのもとで行われる肌の触れ合いは、自分や相手が、身体と精神の統一体であることを分からせる。身体の物理的に空間を占めているという意味とは別種の“奥行き”が分かるものである。その奥行きとは、他者の内面性の深遠さであるし、身体と精神の重なりである。それを感じることで、悲しみ苦しんでいた人は、自分が悲しみにさらわれていたことへの気づきを感じる。それこそが肌の触れ合いによる感情の慰めの最もたるものである。その気づきは言語を介しても行われうるものであるが、それは本人が既にそのことに気づいておりそれを確固たるものにしようとしている、もしくは言語によるアプローチが他者の内密な内面性を一層強固にしてしまわない必要がある。

　肌の触れ合いが言語よりも積極的な価値を持つようになるのは、二つめの愛である「応答愛」が言説だけで試されないところにある。他者の悲しみや苦しみが伝わってきたが、言説でどう応答すればいいか分からないときに、肌の触れ合いはその豊かな価値を発揮する。この分からなさは「応答しなければならない」が「応答したい」に変わるとき―その変化をもたらすのは一つの目の個別性に降りていく愛である―具体的な問題として現れる。肌の触れ合いは、応答として示されるし、その他者と身体と精神の統一体として共にいることがわかるし、立場や役割や関係から制限されることが少ないし、個別性に降りていく愛の思い出し、取り戻しにもつながる。沢山の

ことがそこでは起きている。自覚的かどうかは別として。

よって、肌の触れ合いによる感情の慰めの真っ最中に注がれ、もともとあった親密さを、外の世界を悲しむ人に思い出させる愛は、最初に述べた「個別性に降りていく愛」とはまた別種の、二つ目の「今に作用する応答愛」である。「今に作用する応答愛」は、すでに存在する愛ある関係の“示し”のようなものでは全然ないし―だからこそ全く知らない他者に対しても抱きうる―、今後の社会的関係の発展を目指すことはないし、そのようなものの維持を目指すものでもない。だから、「今に作用する応答愛」と呼ぼう。この「今に作用する応答愛」は、「個別性に降りていく愛」、つまり親密さの基盤となっている愛と同じく、悲しむ人を前にしたときの、どうにかしたくさせる<欲望>の動機となっているのだが、後者とは違い、この「今に作用する応答愛」は応答することができたり、応答できなくとも過ぎ去り忘れられると、もはや“今”ではなくなり、維持されることはない。レヴィナスはこの「今に作用する愛」に急き立てられる〈欲望〉を「責任」と呼んだのだろう。肌の触れ合いは応答を示しやすいために、この「今に作用する応答愛」を実現しやすい。しかし肌の触れ合いを行うためには、触れあうための親密さが必要となる。つまり、今に作用するその場限りの応答愛と、親密さを導いた個別性に降りていく愛の、二つの愛が、肌の触れ合いによる感情の慰めを成立させているのだ。どちらの愛も、これまでの哲学ではあまり道徳的に価値あるものとして取り上げられてこなかったが、感情の慰めの場面において優れた価値を含む愛なのだ。実際にケアが行なわれている場で、その愛の作用に気づいたとしても、必ずそれに意識的である必要はない。なぜなら、それを意識化しているかどうかはケアの当事者たちにとって重要ではないからだ。ノディングズは、その必要の無さについてこう述べている。

> ケアするひとの態度がケアリングを証拠立てているとき、ケアされるひとは喜びに輝き、より強く成長し、自分がなにかを与えられたと感じるより

も、むしろなにかが自分に加えられたと感じる。そして、この「なにか」は、特定するのが難しいかもしれない。実際、偽りのないケアリングの関係にある、ケアするひとと、ケアされるひとにとってどんな種類の変容が生じたかを特定する必要は、どちらの側にも感じられない。（ノディングズ，1977，p.32）

その両方の愛が生じているケアの場面の例を、再び『体の贈り物』から引用してみよう。ホームケア・ワーカーの語り手が、ホスピスへ入ることになったホームケア・エイド利用者で“親友”のリックと話している場面である。

でもほかの人のことは話題にしない。そうしてはいけない決まりになっているし、そうでなくても話したいとは思わない。いま自分がいるところがすべてであるべきだ。いろんなことを一緒くたにしてはいけない。（ブラウン，2004，p.141）

ここに二種類の愛が記述されているのを見ることができるだろう。「いま自分がいるところがすべて」というところに今に作用する応答愛を見てとることができるし、「ほかの人のことは話題にしない」というところには、その目の前の他者に専心没頭することを妨げないようにしようという個別性に降りていく愛があるのが分かる。このあと語り手は「私は手をのばして彼の手を握ろうとした」と言っており、そこには肌の触れ合いが生じようとしているのだ。しかも、その場面の最後では、言語による応答の難しさを肌の触れ合いで乗り越えている。

「君、僕がいなくなったら寂しい？」と言った。私は言えなかった。ばらばらになってしまいたくはなかった。リックを抱え上げようと、私は身を乗り出した。彼の背中の下に両腕を入れて、その体を持ち上げ、抱き寄せた。（ブラウン，2004，p.142）

ノディングズは普遍的なケアリングという考え方を拒否する。私も、その考え方を受け入れることはできない。この二種の愛は、誰かを選択することで、誰かを無視して締め出しているのだろうか。しかし、これらの愛は決して、感情の慰めの場面で、慰める人に無慈悲な選択を行わせはしない。つまり、本当は慰められうるはずだった人が、この愛の選択ゆえに慰められないということはない。なぜなら、私が実際に手を差し伸べられる他者のすべてに手を差し伸べさせるものがこの二つの愛だからだ。この愛なくして、慰めは行われることもない。ゆえに、この愛にもとづくケアは決して矮小で卑近なケアではない。私の最大限なのだ。

おわりに

本論の目的は、感情の慰めの場面に見られる問題を、肌の触れ合いにより乗り越えることであった。問題と共に、肌の触れ合いとそれに関わる様々な要素を検討していくことで、タイトルにもある「関わり生きていく」という部分に、肌の触れ合いが豊かな価値をもって貢献できることが示されたのではないだろうか。肌の触れ合いによって、私たちは言語では難しく感じられた場合にも、悲しむ人に関わっていくことができた。また、悲しむ人が世界からの逃亡をやめ、再び世界に関わり生きていくことを思い出す手助けをすることもできた。そして、肌の触れ合いは、ケアされる人の能動性を維持するものであった。その能動性は、私たちが、世界やそこに生きる他者と関わり生きていくために必要なものである。まさしく、肌の触れ合いは、関わり生きていくなかの慰めと言えるのではないだろうか。

※本原稿は、平成 28 年度大阪大学文学部卒業論文として執筆されました。

参考文献

エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Lévinas）（合田正人訳）『存在の彼方へ』講談社学術文庫,1999

エマニュエル・レヴィナス（Emmanuel Lévinas）（合田正人訳）『全体性と無限―外部性についての試論―』国文社,1989

キャロル・ギリガン(Carol Gilligan)（岩男寿美子・生田久美子・並木美智子訳）『もうひとつの声』川島書店,1986

マックス・シェーラー（Max Scheler）（青木茂・小林茂訳）『シェーラー著作集８　同情の本質と諸形式』白水社,1977

M.メルロ―=ポンティ（Maurice Merleau-Ponty）（竹下芳郎・木田元・宮本忠雄訳）『知覚の現象学 １・２』みすず書房,1974

M.メルロ―=ポンティ（Maurice Merleau-Ponty）（滝浦静雄・木田元訳）『見えるものと見えないもの』みすず書房,1989

M.メルロ―=ポンティ（Maurice Merleau-Ponty）（滝浦静雄・木田元訳）『眼と精神』みすず書房,1966

レベッカ・ブラウン（Rebecca Brown）（柴田元幸訳）『体の贈り物』新潮文庫,2004

矢野茂樹『心と他者』勁草書房,1995

Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini : essai sur l'extériorité*, Martinus Nijhoff Publishers, 1988

（よしかわゆきみ）